

周辺の
みどころ

浮御堂周辺にはみどころは多い。
堅田殿原衆の子孫である居初家の居初氏庭園（国指定史跡）や北村幽安が、茶人の藤村庸軒の指導を受けて作った「天然図画亭」という茶室を見ることが出来る。また、湖畔には明治8年に建造された出島灯台（市指定民俗文化財）、「湖も この辺にして 鳥渡る」と詠われた高浜虚子の歌碑が三上山を背景に、水面に立っている。堅田の漁港入口には「海士の屋は小海老にまじるいとどかな」と詠んだ松尾芭蕉の句碑等を見ることが出来る。



出島の灯台



[アクセス]

●JR湖西線の堅田駅JR湖西線堅田駅下車。浮御堂まで約2 km。町内循環バスあり。出町で下車し徒歩5分。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]

(関連文献/関連施設)

- 大津市歴史博物館『図説大津の歴史』大津市
- 湖族の郷資料館 TEL 077-574-1685
- 大津市歴史博物館 TEL 077-521-2100

うきみどう
浮御堂

ばしょう らくがん
—芭蕉・堅田の落雁—

大津市堅田



琵琶湖に浮かぶ浮御堂（びわこビクターズビューロー提供）

近江と琵琶湖をこよなく愛したと云われている松尾芭蕉が、中国の瀟湘八景（瀟四景・湘四景）をモデルとした近江八景を詠んだ句を遺している。

そのひとつが、元禄3年（1690）冬から翌年の春にかけて大津で詠まれた「比良三上 雪さしわたせ 鷺の橋」である。これは「比良の暮雪」を詠んだ句である。いまひとつは、元禄4年（1691）8月16日に、前夜の義仲寺での月見の俳席に引き続き、十六夜の月を賞すために、門人たちと共に湖上を船で堅田に遊び詠まれたもので、「堅田の落雁」を詠んでいる。それが、「鎖あけて 月さし入れよ 浮御堂」である。いずれも湖を背景とした情景あふれる句である。





浮御堂から琵琶湖をのぞむ（びわ湖ビジターズビューロー提供）

浮御堂—芭蕉・堅田落雁—

所在地 大津市堅田本堅田

浮御堂

浮御堂（国登録有形文化財）は、琵琶湖畔の湖上に突き出た仏堂である。正しくは、臨済宗大徳寺派海門山満月寺というお寺である。寺伝によると開基は、平安時代中期、康保年間頃（964～987）に比叡山の恵心僧都源信が、比叡山横川から琵琶湖をながめていた時に、毎夜琵琶湖が光明する様子を怪しみ、網でこれをすくってみると1寸8分の黄金の阿弥陀仏像であったため、阿弥陀仏像1体を造り、その体内にこれをおさめ、さらに千体の中尊、丈六の阿弥陀仏像を納めて堂を建立したにはじまるという。源信は、ここでひたすら行に務め、毎日のように水想観を行ったといわれている。水想観は、紅白蓮華が乱れ咲く西方浄土の池に思いをこらすもので、源信が浮御堂でこの行を始めると、部屋の中いっばいに水が湧き出て浄土の池にいるような心境になったといわれている。まさに

「近江水の宝」にふさわしい伝説である。

現在の浮御堂は三間四方の単層屋根本瓦葺である。屋根には露盤宝珠をいただき、唐破風の向拝が付いている。創建後、一時期、戦乱によって荒廃していたが、江戸期に桜町天皇から下賜された能舞台が建設された。これが昭和9年の室戸台風で倒壊し、あらためて昭和12年（1937）に再建されている。観音堂内には聖観音座像が千体安置されている。

境内地は国登録名勝となっている。

浮御堂遺跡の発掘調査

昭和57年（1982）には、大規模な修理がなされたが、それに先立つ昭和56年4月から2カ年かけて周囲の湖底の発掘調査がなされた。調査では浮御堂を一旦移設し琵琶湖を矢板で囲い水を掻き出して陸化して実施された。調査では平安時代から中世、戦国時代にかけての各地で生産



芭蕉句碑



堅田から湖東の山並みをのぞむ



堅田の町を縦横にめぐり掘割



現在の湖岸



堅田漁港

された多種多様な陶磁器や土器類、木製品・金属製品が発見された。出土物から、琵琶湖上を行き交う物の様子、堅田の経済力や文化的水準の高さをかいま見ることが出来た。

堅田御厨から自治都市「堅田」へ

堅田は古来より京都に近く、湖上交通の要所として栄えていた。11世紀末頃には、「堅田網人」を主体として京下鴨社の御厨「堅田御厨」となっている。「御厨」とは皇室や神社に献納する飲食物を生産・採取する場所であり、堅田が水産物の水揚げ場として指定されていた。これら献納品を扱う「供御人」と呼ばれ、漁業権

や湖上交通権を得ていた。中世になると比叡山延暦寺とのつながりを強めながら、上乘権という通行権や湖上の関所の管理や湖上を渡る船を承認し安全に航行させる権利を主な収入としながら、より自治的な都市へと発展していったのである。

現在の堅田は浮御堂をはじめとして漁港・船大工・淡水真珠の養殖などといった琵琶湖とのかかわりを深く残している。また、町の縦横にめぐらされた堀割と中世からつづく寺社がみられる。

琵琶湖と人々のかかわりの深さをあらためて思い起こさせる場所である。